

知的障がい児へのコミュニケーション指導と 就職に向けたコミュニケーションスキルの検討

学籍番号 239505

氏 名 劉 李双

主指導教員 湯浅 哲也

副指導教員 岩崎 弘

1. はじめに

1.1 背景

知的障がいとは、「知的機能の発達に明らかな遅れと、適応行動の困難性を伴う状態が、発達期に起こるものを言う」とされている（文部科学省, 2018）。つまり、知的障がいのある児童・生徒は認知や言語など、他人との意思疎通、日常生活や社会生活などについて困難性がある。そのため、生徒の社会参加を促すには、生徒の特性に応じた教育をし、生徒の自立や社会参加を支援することが重要である。社会の中で、コミュニケーションが大事である。コミュニケーションは情報伝達や相互理解を深める手段であり、信頼関係の構築や課題解決、意思決定を促進する。コミュニケーションスキルの向上により、共感を生み出し円滑な対人関係を築くことが可能である。知的障がい児・者のコミュニケーション課題は対人トラブルが多く（城田, 2019）、一斉指導では個々の変化に差が出る難しさがある（村井, 2006）。特別支援学校の就職に向けた支援は障がいのある生徒が将来社会参加をするために必要不可欠であると考えられる。佐々木（2004）の論文では、ディベートを通じて身に付けられる力として、情報処理、傾聴、表現、論理的思考、礼儀という5つの重要なスキルが挙げられている。これらのスキルを身に付けることで、日常や職場のコミュニケーションに活用可能であると考えられる。

1.2 目的

軽度の知的障がい者は、意味の伝達に関する問題があるが、日常生活の会話が可能である。ディベートの授業は知的障がいのある生徒のコミュニケーションスキルの向上が可能か試みる。本研究では、知的障がいのある生徒の実態に基づいた就職に向けたコミュニケーションスキルの習得に関する授業づくりを行うことを目的とする。

2. 研究方法

2.1 対象

本研究の対象は大阪市に所在する知的障害特別支援学校高等部の L コースに在籍する生徒 8 名である。L コースは主に軽度の知的障がいのある生徒である。

2.2 手続き

道徳の授業観察と授業実践を行った。授業観察と授業実践を分析し、比較して発問と教員の

動きが生徒のコミュニケーションとの関係を検討した。また、家庭科の授業観察とディベートの授業実践を行った。ディベートの有用性を検討した。

2.3 分析方法

道徳の授業観察と授業実践は Mills (1996) の分析基準に分類した。家庭科の観察授業は教員と生徒の発言を川口・秋光 (2011)、岸・野嶋 (2006) を参考に作成した発言の項目に分類した。ディベートの授業は指導の流れ、当日の様子及び授業後アンケート、実践の内省を通して、ディベートの有用性を検討した。

3. 結果と考察

3.1 道徳の授業について

基本学校実習Ⅲでは道徳の授業を観察し、授業内容に関して、単純集計を行った。基本学校実習Ⅳでは道徳の授業実践を行った。授業者の発問を Miss (1996) が分類したタイプに分けた。観察授業と実践授業の発問タイプや動きについて比較を行った。その結果、観察授業では、生徒の自由な指導を引き出すため、「開いた発問」が 47.8%と多用されていた。生徒たちはそれぞれの経験をもとに意見を述べ、自己表現力を養うことができていた。一方で、「閉じた発問」は 21.7%にとどまり、特定の情報を引き出す際に限定的に使用されていた。これに対し、実践授業では、「開いた発問」の割合が 34.5%と少なく、「閉じた発問」の割合が 55.2%と多かった。生徒が開いた発問に対して、答えに詰まる場面が多く見られたため、授業進行を優先する目的に出閉じた発問が多用された結果である。このため、生徒間での意見交換や深い思考を促す機会が減少していた。

3.2 家庭科の授業について

発展学校実習Ⅲでは家庭科の授業を観察し、教員と生徒の発言について、単純集計を行った後に、川口・秋光 (2011)、岸・野嶋 (2006) の発話カテゴリーを参考し、新に作成したカテゴリーに分けた。その結果、授業者は音認識ワークの場面では説明が 65.2%占めており、知識の伝達に重点を置いていることが分かった。一方買い物学習の場面では思考の指示が 18.8%で、生徒に自ら考えさせるための工夫が見られた。発展学校実習Ⅳではディベートの授業実践を行った。授業後、生徒にディベートのアンケートを行った。2回のディベートの授業を通して、生徒の思考の変化が見られた。自分の考えだけではなく、他人の考えにも意識し始め、他人の意見を受け入れる姿勢が見られた。

4. おわりに

観察授業と実践授業から閉じた発問と開いた発問を交互に使うことがコミュニケーションスキルを高める上で非常に重要であることが分かった。また、授業者の動きにより、生徒に必要な情報を伝えたり、生徒たちに自ら考えさせたりすることが生徒の思考を促すことが考えられる。さらに、ディベートの授業は、生徒の情報処理能力、傾聴力、表現力、論理的思考力、礼儀などの社会的スキルを育成する上で有用であることが分かった。